

論 説

「記憶」の齟齬からナショナル・アイデンティティの「混乱時期」へ
 ——朱天文『日神的後裔』執筆中断をめぐって——

李 星雨

はじめに

第1節 女性登場人物と宋美齡との関連

第2節 「昨日の世界」、すなわち過去にある「故郷」

第3節 「記憶」が失効する兆し——もうひとつの「故郷」の出現

第4節 「故郷」からナショナル・アイデンティティへ

むすびに

(要約)

本稿は、朱天文の未完の長編小説『日神的後裔』および短編小説「世紀末の華麗」を取り上げ、登場人物たちの「記憶」の齟齬に注目し、「記憶」によって想像・創造された「故郷」のあり様を比較した上で、ナショナル・アイデンティティという視点を通じて『日神的後裔』の執筆中断の原因を探り当てようとするものである。第1、2節で『日神的後裔』のなかの「昨日の世界」について考察し、第3節ではもうひとつの「故郷」の出現について分析し、最後の第4節で「故郷」という概念とナショナル・アイデンティティの関連について検討した。以上の考察を通じて、『日神的後裔』の執筆中断は、「故郷」の変貌という橋渡しを経て、登場人物たちの持つナショナル・アイデンティティの齟齬、さらに朱天文自身のナショナル・アイデンティティの「混乱時期」に直結することを明らかにした。

はじめに

1991年2月、侯孝賢監督の映画『戲夢人生』(1993)の脚本を書き終えた後、朱天文¹はただちに初の長編小説『日神的後裔』の構想と執筆に没頭した。しかし第1章から第7章にかけて5万字あまりを綴った後、続けることができなくなったと感じ、やむをえず筆をおいた。おおよそ1年半後の1992年9月、「泯滅天使」と「日輪月輪」と題した第1、2章が『聯合文学』に掲載されたものの、続きは結局公開されなかった。朱天文は執筆中断について、張啓疆との対談で次のように述べた。

1991年2月、『戲夢人生』の脚本を出した後、私は台北、台湾、古今東西、歴史、神話にあまねく触れる女性物語を構想しはじめた。半年間執筆し、5万字あまりを書いた後、突然書き続けられなくなった。なぜかといえば、構想があっただけで、血肉と枝幹はまだ十分に練られていなかったためだろう² [拙訳、以下同様]。

つまり、『日神的後裔』において朱天文は「構想」、すなわち「台北、台湾、古今東西、歴史、神話にあまねく触れる女性物語」というモチーフを扱おうとしたが、「血肉」と「枝幹」の未熟から、実行に移すことができなかった。対談では、ここでいう「血肉」と「枝幹」が何を指すのか説明しておらず、解釈の余地を残している。一方、この中断という問題は、学界においても明

らかにされてこなかった。『日神的後裔』第1、2章が掲載されてから現在までの30年間、小説自体はほとんど忘却され、『日神的後裔』研究もほぼ空白状態にとどまっている。これまでの朱天文研究において、未完成の作品とされ、彼女の作品世界の周縁に位置づけられてきた『日神的後裔』に言及する場合、『日神』を諦めて『荒人』を完成した」というように、直後の長編小説『荒人手記』（1994）を引き出すきっかけとしてのみである³。では、執筆中断の原因、いわゆる「血肉」と「枝幹」の未熟とは、どのような意味合いを帯びているのだろうか。

歴史、神話や地域にまで、多くの視角を用いて、「女性の情欲」というテーマをめぐる女性物語を繰り広げようとした、という「構想」にもどってみると、前作の短編小説「世紀末の華麗（世紀末の華やぎ）」（1990）の終盤に現れる、予言・宣言との繋がりを看過すべきではないと思われる。「世紀末の華麗」は、次のように結ばれている。

いつの日か男たちが理論と制度で作上げたこの世界は崩壊し、嗅覚と色の記憶で生き残った彼女はその時から新しい人生を歩み始めるだろう⁴。

換言すれば、『日神的後裔』のなかで、朱天文は「世紀末の華麗」で提起された予言・宣言を引き継ぎ、方法としての「記憶」を利用し、その「男たちが理論と制度で作上げたこの世界」を再構築しようとした⁵。しかし、『日神的後裔』には、過去の「記憶」に対する呼びかけ、および疑義が同時に存在しており、ある意味で「記憶」の混乱状態をもたらしている。この点は彼女の構想と背離しているともいえよう。これまで公開された2章の内容とあわせてみれば、『日神的後裔』のなかの眼差しが過去に収斂することで、時間の流れに熟睡していた過去の「記憶」が、宋美齡という象徴性あふれる人物の登場によって喚起されたことがうかがえる。「記憶」の想起を通じて、主人公たちは、はるか遠いところで繋がっている宋美齡に向かい、幾度となく敬意を払うことで、台湾ではすでに消えたが、彼女たちの「記憶」には未だ残っている「昨日の世界」⁶、すなわち過去の「故郷」に呼びかけている。続く第2章の最後では、過去の「記憶」に対する疑義が浮上してきた際に、宋美齡を心の支えとみなしていた主人公の運命は突然逆行して、陳潔如（蒋介石の元妻）の運命と重なり合ってしまう。つまり、過去の「記憶」は一時的によみがえってはきたが、疑義の発生によって雲散霧消することになり、連載もここでぱっと止まった。このように、執筆中断の原因——朱天文のいう「血肉」および「枝幹」の未熟とは、「記憶」の齟齬を指すと思われる。

では、「記憶」に齟齬が生じたのはなぜなのか。『日神的後裔』では、「記憶」が喚起されることで、登場人物たちに求められる「故郷」——「昨日の世界」が姿を現してくる一方、過去の「記憶」が無効になった後の状況は、連載の中断によって探りにくい。だが、朱天文の作品において、「記憶」の失効は新しい出来事ではなく、すでに「世紀末の華麗」においてその兆しを見せていた。「世紀末の華麗」のなかでは、資本主義の著しい発展とともに台湾を訪れた国際色豊かなファッション、香りおよび色彩を組み合わせた記号群が積み重なり、過去の「記憶」を塗り替えながら、ひとつの空中楼閣を築き上げ、主人公ミアの新たな「故郷」となっていた⁷。「記憶」の想起にせよ、

「記憶」の失効にせよ、いずれも「故郷」のあり様を通じて可視化されたことは注目に値する。

本稿では、朱天文の未完の長編小説『日神的後裔』の第1、2章をテキストとして取り上げ、それに関連性が強い短編小説「世紀末的華麗」を対照させて試論を展開する。小説の登場人物によって追い求められる「故郷」のあり様を考察することで、なぜ『日神的後裔』のなかの「記憶」に齟齬が生じたのかを明らかにし、『日神的後裔』の執筆中断の原因に迫ってゆく。これによって、『日神的後裔』研究の空白を埋め、朱天文研究の完全性を補う一助としたい。

第1節 女性登場人物と宋美齡との関連

一生のなかで、女たちに啓蒙の季節がくるとき、彼女の身体、彼女の心理と知恵、彼女のすべてが揺れ動いて伸びやかになり、新しい琴ようになる。深淵のように沈黙し、星空のように真っ暗になり、誰かが彼女を開いて清らかで華麗な楽曲を奏でに来るのを待つ……これらの神母の後裔は今まで四方に広がり、その数は数えきれず、異なる境遇にある⁸。

『日神的後裔』の冒頭を読むと、モチーフを単刀直入に、「台北、台湾、古今東西、歴史、神話にたまねく触れる女性物語」と打ち出す文章が目に入る。本題に入るまえに、小説のストーリーと絡めて、主要な女性登場人物を整理しておきたい。

第1章「泯滅天使」の中心人物は呉安潔である。高級レストランを経営している、眩しいほどに美しい女性である呉安潔は、性愛のハンターたちから、映画『インディ・ジョーンズ・最後の聖戦』(1989)のなかでトレジャーハンターたちが追い求める「聖杯」に等しい存在と見なされている。しかしながら、物静かで、容貌が美しいばかりでなく、優れた経営の手腕も持つ完璧な人間である一方で、「従業員総会症候群」という、誰も知らない弱点に悩んでいた。それは、他者の目を気にし過ぎたり、他者の承認を過度に希求したりすることで、精神が非常に敏感になり、レストランの従業員総会をおこなう前に頻りに下痢をしてしまう、というものだった。

本省人である呉安潔と対照的に、第2章「日輪月輪」の中心人物である趙建蓉の、外省人としての背景は一目瞭然である。1949年、国共内戦で続けざまに敗北を喫した国民党は、台湾海峡をわたって台湾まで退いた。そうした状況の下、趙建蓉は父の命令に服し軍人の鄧氏と結婚して台湾へ移動した。つねに「現世に拒否されている」と感じつつ、各種の切手や切符の収集に夢中になる夫に対し、趙建蓉はマクドナルドなどの新しい文化を楽しむ一方、台湾社会の急変に直面した際には、旧時代の名残を惜しんでいる。注目したいのは、異なる時空間で生活を送り、異なる境遇にある呉安潔および趙建蓉の運命が、つねに宋美齡の生命の軌跡と重なり合っている点である。

まず、呉安潔と宋美齡の二人の関連を確認してみる。

宋美齡が最後に3つのテレビ局のニュースに姿を現したシーンは、そのあと、様々なニュース集において繰り返して放送された……同類相哀れむ。なぜなら彼女〔呉〕にはわかるから

だ。昔、宋美齡はマディソン・スクエア・ガーデンで、抗日戦争の経費を募集するために何万ものアメリカ人に対し演説した。彼女〔宋〕の英語はアメリカの一般民衆に勝り、口調は『風と共に去りぬ』のスカレットのごとく強い南部訛りだったが、演説する前の下痢の頻発を抑えられなかった。まさに彼女〔呉〕の従業員総会症候群のようだった⁹。

こうした記述を読み返すと、次のようにいえよう。呉安潔は、「泯滅天使」の末尾でようやく登場する宋美齡との間に多様な共通点を持ち、ひいては宋を同類と見なしている。「経費募集／従業員総会症候群」（以下、総会症候群と略す）は共通点のひとつで、二人とも折れない「絶壁高花（絶壁に咲く花）」のような外見の奥に、脆くて敏感な感情を隠し持っている。総会症候群に限らず、朱天文の人物描写によると、二人とも台湾の気候／日焼けによる皮膚アレルギーを起こしやすく、高級品を身につけ、スイス製のALBAハンカチ、およびレースの肌着を好む。さらに二人とも「魚族（うお座生まれ）」である。なお、朱天文は呉安潔の思いを通して、同じく「魚族」であるソ連の最後の最高指導者であるミハイル・ゴルバチョフとハリウッド女優のエリザベス・テイラーにも言及する。このように、彼らが「魚族」の人々であることには深い意味が見いだせるのではないか。

ゴルバチョフは最高指導者としてソ連の崩壊に直面したが、「彼女は完全に彼の青写真『ペレストロイカ』を信じる。それは政治家の夢でなく、可憐な詩人の夢だ」¹⁰と、呉安潔は依然として彼を擁護する。しかし、このソ連の政治家と宋美齡とのあいだにどのような関係があるのだろうか。

1991年、ソ連の瓦解が爆発的なトップ記事となったころ、台湾では何が起こっていたのだろうか。1987年の「解嚴」を皮切りに、1988年に蔣経国が逝去し、同年に本省人の李登輝が総統に就任するなど、一連の政治変革が巻き起こっていた。こうした時代の渦中であって、蔣介石誕生百年記念活動（1986年）に参加するため、台湾に舞いもどった宋美齡は、1988年に「老幹新枝（古い幹と新しい枝）」をテーマにして演説をおこなった後、1991年9月21日、中華航空の特別機で台湾を完全に離れてアメリカに定住した¹¹。百箱近くの荷物を運び出した、未曾有の引越しだった。上記引用の「シーン」も「離台返美（台湾を離れアメリカに帰る）」と関連する。聯合報の、「宋女史が台湾を離れることは、蔣一族の台湾における正式な終えんを意味する」¹²という指摘から見ると、ここでゴルバチョフの「詩人の夢」の破滅に言及するのは、宋美齡あるいは彼女に代表される蔣氏国民党政府の「大陸奪還」計画が最終的に破れたことを暗喩するものと思われる。一連の復古的な文化政策、「中華文化復興運動」、「国語推行運動」などを通じて、台湾を「中国化」し「大陸奪還」の拠点とする計画は、蔣氏国民党政権の「詩人の夢」だったといっても過言ではない。しかし党外反対勢力の拡大に伴って、宋美齡（蔣氏国民党政権）の甘美な夢も雲散霧消した。こうした光景に直面して、呉安潔はゴルバチョフを信じるように、さらに宋美齡と彼女が代表する蔣氏国民党政権の「大陸奪還」という「詩人の夢」を信じるようになる。

一方、エリザベス・テイラーについて、呉安潔は彼女の輝かしい映画界における業績、もしくは伝奇的な私生活には言及せず、盛んに議論された事件を引き合いに、以下のように弁護する。

たとえば、同じく魚座生まれに属するエリザベス・テイラーは、ロンドンまで駆けつけてエイズ患者を見舞い、またその中の一人に口づけをした。写真が全世界のメディアに報じられた時、彼女〔呉〕だけが〔テイラーを〕信じた。まさに彼女たち〔レストラン従業員たち〕が彼女〔呉〕を信じるように。それは真実であり、宣伝ではない¹³。

このような記述から、呉安潔は、同じく「魚族」に属するテイラーの、マスコミの追及を招いた劇的な行為には、真心がこもっていると見なしていたことが読み取れる。これは宋美齡とどのように繋がっているだろうか。

呉安潔と比較するために、咪孩という登場人物に注目してみたい。台湾を離れアメリカへ向かうという宋美齡の行動によって巻き起こった「うわさ」¹⁴に対し、咪孩は異なる態度を表明している。小説に描かれた咪孩のイメージは次のようなものである。「3年前に20歳未満」だった咪孩は、「権威が瓦解した年代」に成長し、英語と中国語がまざった言葉を喋りながら楽しみ半分でレストランのアルバイトに応募した。「宋美齡はハンカチを振りながら拍手喝采している同志達と別れる際に、うなずいて微笑んでいた」¹⁵というニュースのシーンを見て、咪孩はすずい声で「あ、老妖怪！」と叫び、明確に否定的態度を表した。蔣氏国民党政権の時代が風とともに去り、神聖な物事は宝石から平凡な石へと変わるように輝きを失い、貶されるほどになった。咪孩にとって宋美齡と彼女の伝説的一生はすではるか昔の出来事だが、呉安潔はテイラーの口づけを信じるように宋美齡の微笑みを信じている。

次に、「日輪月輪」を見てみよう。呉安潔が宋美齡とはるか遠くで繋がっている状況とはやや異なり、趙建蓉はかつて宋美齡に一度会ったことがある。

まるで昨日の事ようだ。夫人は婦女連合会幹事である一行の女性たちを率いて村に来て、軍服を縫う労働者を慰問した……彼女〔趙〕は25歳というところで、もともと活発なので、夫人に花束を捧げさせられた。夫人が着くと、皆は地をゆるがすほど拍手喝采した。まるで本の中の聖賢が民衆を率いてエジプトから脱出し紅海を分けたように、黒山の人波も自発的に道を開けて夫人を通した¹⁶。

宋美齡の象徴的事件のひとつである「縫征衣(軍服を縫う)」をめぐる展開する記述のなかで、注目に値するのは、宋美齡を「聖賢」と擬えている点だろう。「聖賢」に続いて出てくる「エジプト」、「紅海」などの手がかりから、ここでいう「聖賢」とは、虐げられていたユダヤ人を率いてエジプトから脱出したモーセにほかならない。

また、上記引用の「昨日」とは1950年頃を指すと推測できる。なぜなら、蔣氏国民党政府の「大陸奪還」という目標に応じて、宋美齡は1950年から「中華婦女反共抗俄聯合会」を率いて「縫征衣」の活動を展開したからである¹⁷。そして、趙建蓉の夫が軍人であることからすると、ここでいう「村」とは眷村を指すことがわかる。こうした時代背景と趙建蓉の身分を結びつけると、「出エジプト記」という神話を想起することで、国民党政府の遷台を仄めかしているのかもしれない。

このように、外省人である趙建蓉にとって、時間の逆流によって国共内戦が終結したばかりの「昨日」にもどった思いのなかでは、宋美齡は神話の登場人物ほどの存在だと考えられるだろう。

はるかな「昨日」にとどまらず、宋美齡との邂逅がもたらした影響は、「それから長い年月の質素な生活において、この日の記憶は荒野にある甘い泉のように彼女を永遠に潤している」¹⁸ というように続いた。

その〔宋の〕香りは、心にしっかり刻みつけられ、時の流れに伴って深まり、彼女〔趙〕の老いた現在に至り、宝玉に結晶した。ある人が筏に乗って黄河を遡って銀河に着き、洗濯をしている女の子に逢って、石をもらった伝説のようだ。その人がふるさとに戻って長い年月がたった後、客星が牛宿にいつ突き当たったのかをやっと知った。日付を確認すると、それは自分だった。石は織女の洗濯石だ。趙建蓉は老いて恍惚とする時期にはなお遠いが、一瞬目覚めるたびに、自らの一生が確かに平凡で、記念すべきものもなかった気がする。ただ彼女が手中に握っている石は、昔天女に出会ったことの証だろう¹⁹。

宋美齡との出会いの影響は、趙建蓉が「老いた現在」に至り、ますます深まってきた。『日神的後裔』の掲載日と小説につねに出てくる新聞記事（宋美齡の「離台返美」）から、この「老いた現在」を、1991年9月から1992年9月の間だと特定できる。「昨日」と「老いた現在」を比較すると、趙建蓉にとって、40年経っても宋美齡の影響は弱まっていない。また、『聖書』の一方で、古代中国の神話の織女物語も引用されている。趙建蓉は宋美齡を神聖な「天女」と崇め、宋美齡からもらった香り（影響）を「宝玉」と見なすように、趙建蓉と宋美齡との結びつきは明確である。はるかな「昨日」から「老いた現在」までの40年にわたり、蔣氏国民党政権が瓦解するのを目撃した外省人である趙建蓉にとって、宋美齡ははじめて会った時から「現在」まで、依然として神聖な人物（モーセと織女）だったのである。

以上、互いに全く面識のない呉安潔および趙建蓉のいずれも、宋美齡とさまざまに結びついており、宋を恭しく崇拜していると結論できる。

第2節 「昨日の世界」、すなわち過去にある「故郷」

前節で述べたように、主要な登場人物である呉安潔と趙建蓉の運命は、つねに宋美齡の生命の軌跡と重なり合っていた。周知のとおり、中華民国の国母として、卓越した語学力と外交能力によって国際交流に関わった宋美齡は、蔣介石が主導する国民党政権において、全局面を左右できる地位に立ち、中華民国の代表的記号のひとつとなった。時代の変わり目の台湾で日々を送る登場人物が、頻繁に宋美齡に向かって、彼女の往事をふりかえりながら敬意を払うことは、何を意味しているのだろうか。

1. 二分された「世界」

「泯滅天使」の末尾で姿を現す宋美齡とともに、「世界」という言葉がはじめて登場する。

旧世界はあの辺にある。赤道無風帯はすごく憂鬱だ。暗い雲は、そのバランスを乱す風がないので、地球の重力を受け、徐々に解体しながら海面に向かって落ちる。そう、新世界はそこにある。コロンブスが見つけてからもう五百年近く経つ²⁰。

こうした記述を読むと、呉安潔の意識にある「世界」は、ある基準によって二分されていることがはっきり読み取れる。新旧世界の範囲を限定するため、具体的な地域、あるいは場所に迫っていきたい。

まず、「旧世界」の後ろに続いて現れる「赤道無風帯」と、語り手の所在を結びつけて考えると、「旧世界」とは現在の台湾を指すに違いない。当時の政治環境と繋げると、記述の前半では、蔣氏国民党政権（暗い雲）が本土派勢力（地球の重力）の衝撃を受けながら解体しており、大変憂鬱な台湾（赤道無風帯）はすでに「旧世界」となった、と解釈できるだろう。一方、「新世界」はどこにあるのだろうか。「コロンブス」という手がかりからは、「新世界」を「南北アメリカとオセアニアおよび太平洋などの海域」²¹まで限定できるが、これ以上分析を進めることはできなかった。しかし、「泯滅天使」の終盤で、「新世界」の範囲に属するアメリカの物事が、「全世界は前に向かって転がっているが、ローカスト・バレーは相変わらず昔のようだ」²²という形で登場していることから、「新世界」はアメリカのローカスト・バレーへと移り変わっている、と結論できるだろう。

ローカスト・バレーはアメリカのニューヨーク州、ロングアイランドに位置する、宋美齡の最後の住まいの地である。「新世界」がアメリカに移り変わったことは、宋美齡の足跡と結びついているのである。

蔣介石が永眠した後、宋美齡の数度にわたるアメリカと台湾の間の往來を簡単に整理しておこう。1975年、蔣介石が世を去った同年に、宋美齡は台湾を離れてローカスト・バレーに移住した。1986年、蔣介石誕生百年記念活動を機に、11年ぶりに台湾の土を踏んだ。1991年、宋美齡は大量の荷物を携えてアメリカに定住する。その後、台湾に帰ったのは、病中の姪孔令偉を見舞うための短期滞在（1994年）だけである。こうした時代背景と結び合わせると、「新世界」に関する記述は、現在の台湾も含めて全世界がますます発展している一方で、宋美齡が定住し晩年の歳月を送るローカスト・バレーは「新世界」となったが、この世界は相変わらず過去の台湾のようだ、とっていると理解できるだろう。言い換えれば、「新世界」は単に新たな世界を意味するのではなく、宋美齡の足跡に付きしたがって拠点を台湾からアメリカへ切り替えた過去の台湾、すなわち「昨日の世界」でもある。

「泯滅天使」のみならず、「日輪月輪」においては、夏目漱石の『三四郎』を引用して、二分された「世界」について語っている。

世界はかやうに動揺する。自分は此動揺を見てゐる。けれどもそれに加はる事は出来ない。自分の世界と、現実の世界は一つ平面に並んで居りながら、どこも接触してゐない。さうして現実の世界は、かやうに動揺して、自分を置き去りにして行って仕舞ふ。甚だ不安である²³。

新旧世界の区別とは異なるが、「日輪月輪」においても、「世界」は「自分の世界」と「現実の世界」に二分されている。「泯滅天使」と「日輪月輪」を連続させて考えれば、新旧世界と「自分の世界」／「現実の世界」とはそれぞれ互いに対応しているといえよう。その揺れに陥っている「現実の世界」は、後裔たちが生活を送る、さまざまな政治変革が起きている現在の台湾、すなわち「旧世界」と推測できる。そして、後裔たちは変わり目の台湾に直面して、現在の台湾から拒否されていると感知し、その「現実の世界」から隔絶した「自分の世界」の存在を意識する。この「自分の世界」とは、現在の台湾に背いて、宋美齡の歩みとともにアメリカのローカスト・バレーへと移った、「記憶」とどまる「新世界」、すなわち「昨日の世界」である。このように、後裔たちは台湾で蔣氏国民党政権の解体、および一連の変革を目撃し、現在の台湾から拒否されている現実を悟りつつ、新拠点へと移転した「昨日の世界」に対する追憶に耽っている、と理解することができる。

要するに、台湾で日々を過ごす「日神」の後裔たちは、宋美齡の「離台返美」という行動にしたがって、現在の台湾に対して疎外感をおぼえ、かつて経験した懐かしい「昨日の世界」の「記憶」に浸りながら、現在の台湾と一線を画している、という結論が生まれる。つまり、登場人物たちは幾度となく宋美齡の逸話と美談を思い出すことで、宋美齡というイメージを超えて、彼女に代表される昔の中華民国、すなわち台湾ではすでに消えたがローカスト・バレーにはまだ残っている、懐かしい「昨日の世界」に対し、ひたすら思いを馳せているのだろう。

2. 台湾の変わり目

では、後裔たちの「記憶」に存在する「昨日の世界」には、どのような世界が映っているのだろうか。ここでは、蔣氏国民党政権が瓦解して以降の、台湾の変遷に関わる一節を選び出し分析していきたい。

彼女〔趙建蓉〕は毎月バスに乗って家賃を受け取りに行く際に、あるマンションの下を通る。出入り口にある銅合金製の銘板の上に、「新疆省政府辦事處」という八個の黒字が嵌められ、磨かれて鏡のように光る……なるほど海棠から雄鶏に変わっても、新疆は相変わらず存在する。彼女は、昨日は用事を済ませることができず、今日もう一度来た。夜に寒波の前線が上空を通過し、その一夜のうちに、事務所の銘板は取り外されて跡形もなくなった……家の路地口にある24時間営業の加盟店を経営している老陳は、「統一企業はもう新疆に行ってトマト園を買った」と誇る。マンションにある省政府の主席が世を去った後、彼の息子が後任となり、15人の部下を率いたのに、一夜のうちに、このように、新疆省が消えた²⁴。

「新疆省政府辦事處（新疆省政府事務所）」という8文字が嵌められた銘板（以下、銘板と略す）の状態によって、台湾政治および経済環境の急速な変化の一端を表現するこの文章には、注目すべき点がいくつかある。

まず、「海棠から雄鶏に変わっても、新疆は相変わらず存在する」という箇所に着目したい。「海棠」ないし「雄鶏」は、いずれも中華民国領土の形容である。新疆が出てくるが、ここで関係する領土紛争の原因のほとんどは、モンゴル人民共和国（以下、外モンゴルと略す）の独立問題をめぐって発生した。よって、第二次世界大戦終結以降の中華民国の、領土変遷および対蒙（外モンゴル）政策を簡単に整理しておきたい。

大戦終結をきっかけにして、中華民国政府は「ソ連側の譲歩、すなわち中国東北部からのソ連軍早期撤収、新疆北西部のイリ勢力による東トルキスタン共和国運動や中国共産党の活動に対するソ連の不関与を勝ち取」²⁵りながら、共産党勢力の排除という政治的目標を遂げようとした。そのため、1945年8月14日に締結された「中ソ友好同盟条約」、および外モンゴルにおいて実施した住民投票の結果にもとづき、中華民国政府は1946年1月5日に初めて外モンゴルの主権独立を認めた²⁶。これによって、外モンゴルを除いた中華民国の領土の形は、海棠から雄鶏へ変容した。しかしながら、ソ連側の破約が事実となると、中華民国政府は1949年9月以降、国際連合の裁決を要請するが、思うような結果を得られなかった²⁷。国連に上訴してから3年後の1952年2月、国連総会でアメリカの支持を受けながら圧倒的な勝利を得た中華民国政府は、「中ソ友好同盟条約」を廃止した²⁸。外モンゴル独立承認も「当該条約の破棄に伴い無効化された」という論理ができあがった²⁹。このようにして、中華民国においては海棠の形らしき領土を表示する地図が再び公式の地図となり、教育と政治（国民大会）の場で用いられた³⁰。

しかしながら80年代半ばの民主進歩党の結党、および80年代末の蔣氏国民党政権の終焉に伴って、本省人として初めて総統となった李登輝の就任を契機に、中華民国の対蒙政策は新時代の幕を開けた。80年代から台湾独立を唱えてきた民進党は、外モンゴル問題を、当時国民党政府の進めていた台湾「再中国化」政策に対する大きな打撃（大陸から離脱する行動の一環）となる、と見なしていた³¹。そのため、「民進党系立法院議員は議場での臨時質疑及び質問状を通じ、国民党政権が「美しい『秋海棠』」と形容する中華民国はすでに「醜い『老母鶏』」となっている現在を直視する」³²べきだと主張し、外モンゴル独立の承認に肯定的な姿勢を表明した。一方、蔣介石、蔣経国が主導する国民党政府による、「中ソ友好同盟条約」の破棄以来堅持されてきた、外モンゴルに対する主権の主張について、李登輝総統は一変する態度を取った³³。1991年4月30日、「動員戡乱時期」を終結すると宣言した後の内外記者会見において、李登輝は、「外蒙古の問題は早々と独立していることであり、わが政府自体の外蒙古に対する態度にはまだ一致した見方はない……私が理解している限り、わが憲法制定以前、外蒙古は独立していた」³⁴と語った。その後立法院は李の発言に対して「外モンゴル独立は事実であるが、当面は承認すべきでない」³⁵と否定的な立場を示したが、大量のメディア報道によって、外モンゴル独立問題は再度公衆の注目を浴びて盛んに議論された³⁶。

外モンゴル問題は時の流れとともに忘れられ、新疆と関わる問題が再び現れる。前述の引用の

全体を貫くのは、過去の中華民国の政府機関と位置づけられた「新疆省政府辦事處」の銘板の状態をめぐって展開していることがわかる。よって、次に「新疆省政府辦事處」の経てきた歴史および中華民国政府との関係をふりかえりたい。

「新疆省政府辦事處」の前身は「新疆省主席辦公處（新疆省主席事務室）」である。1949年、国民党が内戦で敗北を喫して遷台する過程で、新疆省主席および新疆綏靖總司令だった堯樂博士（Yolbas）も、軍隊とともに台湾に到着した。1951年7月1日、彼は蒋介石總統の要請に応じて、台北市四維路52巷31号（小説中の「あるマンション」）に「新疆省主席辦公處」を設立し、台湾を「大陸奪還」計画の拠点と見なす当時の国民党の見解にふさわしい執務を担いはじめた。具体的には、大陸を回復した後の新疆省の再建計画、台湾あるいは海外に滞留している新疆同胞との連合、中東および中央アジアのイスラム国家との交流などである。

堯樂博士は20年にわたって「新疆省主席辦公處」の主席を務めたが、1971年7月に永眠した。行政院の命令に従い、「新疆省主席辦公處」は「彼の息子が後任となり、15人の部下を率いて」³⁷「新疆省政府辦事處」へと改組された。以前の事務を引き継ぐと同時に、新疆省の歴史および文化を広めるため、新疆省と関わる文化と言語の研究に対する支援を開始した。新疆の文化的価値を重視した背景には、「対岸で一九六六年に発動された文化大革命に対抗するため、蒋介石によって同年に始動された中華文化復興運動」³⁷という、大規模な官製文化運動の波があった。しかし1970年代後半に入ると、蔣経国による「文化建設」という「文化的『本土化』政策の起点として」³⁸の新たな政策の開始に伴って、「国民党の『内向きの姿勢』が顕著に表れ」³⁹たため、「新疆省政府辦事處」の存在感も徐々に希薄化する。1991年に発表された「動員戡乱時期」の終結宣言によって、中華民国政府の「大陸奪還」計画が過去のものとなると、1992年1月16日、「新疆省政府辦事處」は撤廃の終局を迎え、40年の歴史に幕を閉じた⁴⁰。

もうひとつ、台湾経済環境の変化に触れた、「統一企業はもう新疆に行ってトマト園を買った」という記述を見ておきたい。

1949年台北に遷都して以来、台湾島に滞留する中華民国政権と、中国大陸で樹立された新政権、すなわち中華人民共和国が、台湾海峡を挟み交流を一切断って対峙する状態となった。中華民国が実権を握っていた台湾全域では、戒嚴令が38年間にわたり施行され続けた。

1979年元旦に中国大陸側が発表した「告台湾同胞書」に対し、台湾側は1980年代末まで「三不政策」を堅持して、中国大陸側の「平和統一」の呼びかけを無視し続けた⁴¹。しかし1987年7月の戒嚴令解除と同時に、中台の交流はついに雪解けを迎えた。経済的側面としては、「探親等による大陸との接近で大陸への投資増加の方に、香港中継貿易が急増している」⁴²。石田浩によれば、1990年10月6日の行政院大陸委員会による「対大陸地区従事間接投資或技術合作管理辦法」の公布により、かつて探親などの形式を借りた密貿易とされていた対中間接投資が、明確に合法化されたという⁴³。こうした対中経済政策の転換の背景には、石田のいうように、安価な労働力を求めて中国大陸へ生産拠点をシフトさせる経済的要因の一方、1980年後半の民進党結党を皮切りとする、台湾民主化の急速な発展という政治的要因もあった⁴⁴。このような新しい局面に際し、台湾系の統一企業は1992年1月13日、大陸投資の試みとして新疆省に新疆統一企業食品有

限会社を設立した⁴⁵。

以上を踏まえて『日神的後裔』にもどろう。1992年現在、「日神」の後裔である趙建蓉の視線を通して展開される「旧世界」ならびに「現実の世界」には、蔣氏国民党政権の瓦解と同時に、領土範囲、政府機関および経済環境の側面ですべても巨大な変革が起きた。その変革とは、台湾民主化の高まり（上記引用の「寒波の前線」）に伴う、中華民国政府の外モンゴル、新疆、ひいては中国大陸に対する見方の転換である。このように見てくると、「日神」の後裔たちの「記憶」にある「昨日の世界」は、次のように復元することができるだろう。「昨日の世界」においては、実権を握っていない地域の政府機関も設置されており、中華民国の地図は欠けるところなく美しい「海棠」の姿をしている。また中華民国政府は、中華人民共和国との間に境界線を引き、唯一の「正統」であるという見解を持ち続けている。「昨日の世界」はかつて蔣氏国民党政府が唱えた「中国史観」⁴⁶の産物そのものであるといえよう。

第3節 「記憶」が失効する兆し——もうひとつの「故郷」の出現

しかし、「昨日の世界」に対する呼びかけが字句の端々に満ちているにもかかわらず、第2章の最後、すなわち連載が中断された節目で、蔣氏国民党政府の「神話」、そして「記憶」そのものに対する疑義が突然浮かび上がってくることは注目に値する。鄧氏（趙建蓉の夫）の友人で、「光復大陸設計委員会」にかつて勤務していた陶氏の登場について、次のような記述がある。

陶さんは創刊30年以上をへた雑誌一冊を持ってきた。かつて鄧さんもよく読んだやつだ。しかし、史料が絶えず発見されるようになってから、それらはひとつずつ鄧さんの信念を壊していった。民は信じるものがなければ立ち上がらない。弱い立場にある自己を保身するために、彼〔鄧さん〕はまた内幕を知ることを拒否する⁴⁷。

この「史料」とは「蔣介石陳潔如溪口祭祖（蔣介石と陳潔如が溪口で祖先を祭ること）」である。1927年9月末、宋美齡と結婚することで、宋氏一家の支援を獲得しようと、蔣介石は『民国日報』、『申報』などの上海の主な新聞にて、「民国十年、元妻の毛氏と正式に離婚した。ほかの二人〔陳潔如、姚冶誠〕については、もともと婚約していなかったが、今はすでに私と関係を絶っている」⁴⁸という旨の「蔣中正啓事」を掲載し、陳潔如との婚姻関係を否認した。しかし、それは事実ではなかった。「張静江は仲人をつとめた。立会人も彼だった。戴季陶は司会者をつとめた」⁴⁹こと、「蔣君〔蔣経国〕は上海のお母さんと彼女を呼んでいた」⁵⁰といった証拠が次々と出てくる。昔の秘話が数十年ぶりに陽の目を見て、ニュース、ひいては趙建蓉が美容院で耳にする話題になっていた。このような「史料」の発見により、蔣介石と宋美齡の愛情「神話」も断片的に瓦解し、蔣氏国民党政府が唱えていた「神話」の崩壊を側面から反映した。陶氏、また鄧氏がかつて堅く信じていた「記憶」はすべて虚言となった。のみならず、第2章の終盤で、「彼女〔趙建蓉〕の悔しい思いに関して、明鏡が高かかって包青天が再び現れるように、陳氏はすでに彼女の代わ

りに訴えた」⁵¹と書かれているように、宋美齡を「天女」とみなしていた趙建蓉の運命は突然逆行し、陳潔如の生命の軌跡と重なってゆく。これは「記憶」の失効が後裔たちへも蔓延してゆくことを暗示するのかもしれない。しかし、連載はこの部分で中断された。

朱天文の作品では同様な疑義がしばしば出てくる。直前の短編小説集『世紀末的華麗（世紀末の華やぎ）』（1990）では、眷村出身の人びとが中国大陸という「故郷」に対して持つ見方と感情の変容を通じて、過去の「記憶」に対する疑義がその兆しを見せていた。巻頭におかれた「柴師父（柴師父）」（1988）で、台湾に滞留して本省人と結婚したマッサージ師の柴師父は、「彼の息子たちは、本省人である妻たちよりもっと本省人らしい。共に本省人の女をめとり、孫たち共々しょっちゅう柴明儀の存在など忘れて彼らの大好きな言葉〔台湾語〕を話している」⁵²場面を目にし、孤独感を味わう。彼は故郷昆明の暖かい季節と雨に濡れた美しい八重桜に思いを馳せる。続く「帶我去吧、月光」（1989）では、「解嚴」を背景として、外省人である程太太が中国大陸へ帰省する旅に触れている。ようやく「記憶」のなかの桃源郷に戻れたものの、「記憶」と現実の激しい落差を感じてから台湾に戻ると、程太太は悲しそうに、「とにかくここ〔台湾〕に定住した。もしこれからそこ〔南京〕に再び行けば、出戻り扱いだよ、郷に入れば郷に従うしかない」⁵³と嘆く。

1年後、同名の短編小説「世紀末的華麗」では、主人公は中国大陸の直接的経験を持たぬ外省人第二世代のミアへ切り替わるとともに、その中国大陸に対する感情も一変している。ミアは中国大陸との繋がりから完全に切り離されて、ファッション、香りおよび色彩などの記号によって構築された、国際色豊かな空中楼阁、すなわち新たな「故郷」に身を寄せている。

新たな「故郷」のあり様を考察するまえに、「世紀末的華麗」のストーリーを簡単に紹介しておきたい。「世紀末的華麗」は、25歳だがすでに青春を失ったと思っているヒロインのミアをめぐる展開する。ファッションモデルであるミアは、長身で美しく、目まぐるしく変わるファッションの情報に囲まれている。ファッションを組み合わせた空中楼阁で生活を送るミアは、ファッションの情報を通して時間や空間の「記憶」を思い出す。朱天文によって「匂いと色彩の信奉者」として設定されたミアの「記憶」はつねに匂いと色彩に結びついている。一方、勝手な態度で感情と性を扱うミアは、ハンサムボーイたちとの恋愛に飽きた後、既婚男性の段との不倫に溺れている。

1. 記号

ロラン・バルト『モードの体系』（1967）は、衣服という概念をその構造（工学的、イコン的、言語的）により、「現実の衣服」、「イメージとしての衣服」および「書かれた衣服」の3種類に分けた⁵⁴。「書かれた衣服」とは、「現実の衣服」と完全に異なり、「記述され、ことばに変形されている」衣服だと定義された、ことば、文字によって構成され、現実の衣服をなぞるようなシステムのことである⁵⁵。「書かれた衣服」の意味作用論について次の論述がある。

雑誌の陳述はすべて、陳述を組み立てている語という段階を越えたところで、意味作用の

体系を構成しているのだ。それを構成する記号作用部〔能記〕は、非連続の、物質的な、数えられ、目に見える辞項をもつもの、つまり衣服であり、また、記号意味部〔所記〕は、非物質的であり、場所に応じて、世界であったりあるいはモードであったりする⁵⁶。

文字によって構成された「書かれた衣服」の場合、その記述的ことば（衣服に関する描写）と、そのことばが代表している、あるいは暗示しているある情報（ロラン・バルトのいう「世界」や「モード」）が組み合わさって、隠喩の記号を形成する。この結論を借用して、まるでファッション雑誌のような短編小説「世紀末的華麗」のなかの、溢れるほどのファッション表現を解釈するならば、ファッションの記述とその底に隠れている情報との結合を、記号と見なすことができるだろう⁵⁷。それでは、記号に隠れた情報、朱天文が実際に伝えようとしたのは一体何だろうか。

小説における大量のファッション表現から一段落を抽出してみよう。

時代は変化し、コム・デ・ギャルソンの川久保玲は彼女自身その伝道者の一人であったユニセックスと決別して女性らしさを追求する陣営に寝返り、薄手の布地や何層も重なったラインの不規則なカッティングで優しさを強調するようになっていた。その傾向は以前から現れていて、まず八七年に邪悪なセラピム、ガリアーノが何と清純派に回帰し、さらに十九世紀の進んだ女性の象徴であるシャネルスーツや、胸ぐりを大きく開けウエストを絞ったフレアースカートのイブニングドレス、またその年、王室で最も愛されたコロニアル・ホワイトなどが次々と登場した⁵⁸〔傍点は引用者による。以下同様〕。

全世界で愛されるファッション・ブランドや才気溢れるファッション・デザイナーから、衣服のスタイル、生地、コーディネート、およびカッティングに至るまで、一連のファッション情報が絶えず現れて、文章の流れに沿って積み重なっている。だがそれらの表現は、細部に至る過度な描写に溺れることなく、ごく簡略化されて、「女性らしさ」あるいは「清純派」といった抽象的特徴のように概括されている。具象的特徴にも少し触れているが、その部分は深まっていない。朱天文が言い表そうとするものは、単純な衣服そのもの、あるいは衣服を直接真似てなぞる段階にとどまらず、ファッションの記述の底に隠れた情報だと推測できるだろう。ファッションに関する記述以外に、「時代は変化し」や「八七年」のような、時間を指示することばもある。「時代は変化し」、日本出身のデザイナーである川久保玲のスタイルも一変する。その傾向の幕開けは、1987年、イギリス出身のデザイナーであるガリアーノの「清純派」への回帰だった。朱天文は衣服のスタイルと時間との間の結びつきを構築することによって、ファッションの変化を通して時間の経過を表現した、と解釈できる。また、ファッションの記述を通じて表現されている時間の流れがかなり圧縮されていることにも注意すべきだろう。それは、おおよそ1年間にわたる時期の「記憶」が、ほんの数行の描写的文章、ひいては数個の概括的特徴に収まっているのである。

隠れた情報はそれにとどまらない。王徳威は、ファッション情報と政治との繋がりを読み取っている⁵⁹。「世紀末的華麗」において、ファッションと関わる記述は、1984年のミアが「馴染ん

できたデビッド・ボウイやボーイ・ジョージのようなバイセクシュアル・ファッション」⁶⁰ および日本出身のデザイナーである金子功のカントリースタイルから始まり、1992年冬の帝国様式のスタイルで終わる。ミアの語るところでは、ファッションの「分水嶺」は1987年秋にある。当時の台湾の政治環境と絡めて見ると、この時期はまさに台湾の民主化が高まっていた頃である。しかし変革する世界に直面しても、ミアは政治色の強い情報（事件）を一切無視し、かわって当時の最も代表的なファッションやスタイルによって歳月を記憶する。たとえば、あるビデオテープにおいて、「彼女たち偽マドンナの一团と、夫に代わって立法委員に立候補した呉淑珍（ウーシューチン）の宣伝カー、そしてコラソン・アキノの平和革命を象徴する黄色いリボンの海の映像」⁶¹ が入り交じって繋がっているように、ミアの生活と台湾の政治的活動との結びつきは奇妙なものである。しかしミアは、政治的事件（立法委員の立候補）には関心をあまり持たず、全身全霊をその時のファッション（マドンナ式スタイル）に傾ける。このように日々を過ごすミアは、ファッションという政治色の薄い情報に夢中になる姿勢を通じて、政治変革問題を覆いながら、独自の「記憶」システムを構築する。

以上を踏まえると、簡潔だが密集するファッションの記号の底に隠れた情報は、時間の経過のみならず、ミアによって極度に圧縮される時間と、政治性の強い歴史を避けた「記憶」とによって、かなり軽量化された身近の世界をも意味する、ともいえる。ファッションの記号のほかに、匂いあるいは色彩の記号も同様の役割を果たすものとして多用されている。

2. 国際色豊かな空中楼阁

前節で触れたように、朱天文はファッションおよびそれに付随する匂い、色彩の記号を通して時間の経過を表現した。さらに、記号の華やかで軽やかな特性によって、政治や歴史の重い雰囲気除去しながら、数多くの記号を「煉瓦」として、ミアの軽量化された身近な世界に組み合わせた。しかし記号の「国籍」を確認すると、「世紀末的華麗」のなかの多種多様な記号はおおよそ舶来品であり、台湾とも中国大陸とも関係がない。

インド・ルック（インドスタイル）、ビーチ・カラー（北極海の家辺）、ロマンスグレー（日本語の言葉）、トパーズ色の乳香（アフリカ大陸東部やアラビア）、三宅一生（日本人デザイナー）、アルマーニ（イタリアブランド）、モスキーノ（イタリアブランド）、ロココ王朝のバロック風な紫色（ヨーロッパ）、ソ連製の腕時計（ソ連／ロシア）、ダイアナ・カット（イギリス王妃の髪型）……。朱天文が用いる記号は古今東西の世界中に広がっている。このような華やかな記号群のなかに台湾や中国大陸に関わる記号がほとんどないことは奇妙に思われる。こうした国際的なファッション記号群の存在に対応するのは、主人公であるミアの中国大陸と台湾本土に対する拒否の姿勢である。それは、中国大陸に対する無関心（中国大陸経験の欠落）、および土着の台湾（台中）の土を踏んだ後、「列車が南に進むにつれて風景はますます異国のようになり、生えている木々さえも彼女には馴染みのないものとなった」⁶² というように、「異国」に滞留しているかのように感じる気持ちからうかがえる。台中の民衆に溶け込めず、異類の「E・T」だと自覚するミアは、予定を繰り上げて台中の旅を終え、賑やかな都会台北に戻ってようやく「水を得た魚のように元

気を取り戻した」⁶³ 後、次のように心境を告白する。

台北・ミラノ・パリ・ロンドン・東京・ニューヨークが混ざり合った街、これがミアの故郷だった。彼女はこの街の風俗を身につけ、この街の遊びを楽しみ、この街の養分を吸い込むことによって生きていくことができる人間だった⁶⁴。

台湾の眷村で成長し、外省人第二世代という共同体に所属するミアの「故郷」⁶⁵ は、中国大陸でもなければ台湾でもなく、台北・ミラノ・パリ・ロンドン・東京・ニューヨークが混ざり合った国際的な連合体にある。この国際的な連合体は一体何を意味するのか。

まず、「台北」に注目しておきたい。台中まで旅行をする際、列車に乗って台北駅を出たところで、「両側に続く古ぼけた汚らしい町並み」⁶⁶ が目に入る。ミアが抱いていた台北市のイメージと全く異なる風景は彼女を驚かせる。ミアは台北の全体もしくは真実の台北には馴染みがない。ここで登場する「台北」は、実際の台湾の都市ではなく、ミアが日々を送る繁華な台北市の中心地域、国際的な記号に満ちた「台北」を指すといえよう。「台北」以外の国際的都市を見てみると、華やかな記号の「国籍」は、ここで挙げられた「ミラノ・パリ・ロンドン・東京・ニューヨーク」に限らず、古今東西世界中に広がっている。流行の先端と見なされるこれらの都市には全世界のファッションの情報が氾濫している。「台北」と同様に、「ミラノ・パリ・ロンドン・東京・ニューヨーク」の場合も、実際の都会ではなく、国際的なファッションの記号が蔓延する空間という「見えない都市」を意味すると考えられる。

要するにミアの「故郷」とは、国際色豊かなファッションの記号によって構築された空間である。この空間は、極度に圧縮された時間および政治色の強い情報を避けた「記憶」によって、いっそう軽量化されて空中楼阁へと変貌を遂げたのである。

第4節 「故郷」からナショナル・アイデンティティへ

既述のとおり、『日神的後裔』および「世紀末的華麗」の登場人物たちは、異なる「故郷」（「昨日の世界」、すなわち過去の「記憶」に残る「故郷」、あるいは国際色豊かな空中楼阁という新たな「故郷」）を求めている。ただし「故郷」という概念は、登場人物たちのナショナル・アイデンティティとも関連していると思われる。成田龍一は、「故郷は、各人がそれぞれのアイデンティティに応じ、現在の状況において選択し提示しているということである」⁶⁷ と、「故郷」とアイデンティティの結びつきについて語りつつ、「故郷」とネーションとの相似性について、ベネディクト・アンダーソンの論説を引用しながら次のように指摘している。

「故郷」は、いくつもの拠点と論理をもち構成されている。歴史と地理、そして言語。時間、空間と移動。これらは、過去と現在をむすびつけ、未来へと向かう時間的一体性を形成する。また、共通の言語をあやつり、共同の習慣をもつ空間的一体性を醸成する。そして、これら

がともに共通の起源をもち、共通の文化となり、共通の感情を養成するという「語り」によって、共通の時空間が「故郷」と名づけられ、たちあられる……アンダーソンは、ネーションとナショナリズムを俎上にあげるが、ネーションとナショナリズムが「限られたもの」として想像され、「水平的な深い同志愛」として思い描かれるさまは、「一つの共同体」の想像＝創造として、「故郷」と相同性をもつようにみえる⁶⁸。

各自のアイデンティティに応じて選択され、構成され、そして想像・創造された、「故郷」にしても「ネーション」にしても、ひとつの共同体の凝結にもとづいたものだと成田は述べている。台湾という特殊な文脈を考えると、『日神的後裔』および『世紀末の華麗』における「故郷」は、「村、町、都市」という区別によるものではなく、「中国大陸、台湾、世界」との繋がりを有するものである。それゆえ、「中国史観」の産物あるいは「国際色豊かな空間」を「故郷」として認める登場人物の視線によって、「故郷」と「ネーション」はある部分において重なり合い、軌を一にするとと思われる。『日神的後裔』のなかの、互いに全く面識のない呉安潔、趙建蓉、さらには執筆の中断によって登場しなかった潜在的な登場人物は、時空間の境を越えて、心のなかの「共同の聖餐のイメージ」⁶⁹——宋美齡と密接に関わりあう過去に存在する「故郷」、蔣氏国民党時代の中華民国の「記憶」を想起することで、アンダーソンのいう「想像の共同体」を構成している。「旧世界」／「現実の世界」で日々を過ごしていても、彼女たちは「記憶」に残る「新世界」／「自分の世界」——「昨日の世界」をふりかえり、自分の「故郷」とみなし、その世界を固守する。

一方、『世紀末の華麗』に登場するもうひとつの「故郷」、すなわち実際の空間を超え、真実の台湾ないし中国大陸とは繋がることのない国際色豊かな空中楼阁は、過去の「記憶」を顧みぬ主人公ミアと中国大陸もしくは台湾との距離感を提示している。それは、彼女たちのナショナル・アイデンティティによって波紋が広がったためである。換言すれば、ふたつの小説における登場人物たちの意識にある「故郷」のあり様の差異を通じて、彼女たちの持つナショナル・アイデンティティの相違が可視化されて、「故郷」の変貌とあわせて表裏一体の間柄に結びつく。このように、『日神的後裔』の登場人物である趙建蓉が、過去の「故郷」に繋がる「記憶」を想起すると同時に、疑義をも抱くことは、彼女のナショナル・アイデンティティに齟齬が生じたためといってもいい。しかし、同一の登場人物のナショナル・アイデンティティに齟齬が生じるのは、なぜなのか。

それを説明するためには、時代の潮流を彷徨う作家自身に戻らなければならない。異彩を放つ短編小説集『世紀末の華麗』が出版されると、台湾文学界では朱天文が「前身」に別れを告げる、転換点となる作品だとみなされ、さらに後に出た長編小説『荒人手記』および『巫言』（2007）とあわせて「三部作」を成し、彼女の代表作群となった⁷⁰。朱天文自身も、文学界の見解に対応するように、相次いで出版された「三部作」について、3回の「攻堅（攻めること）」を経て、とうとう「あるもの」に対する「棄絶（すてること）」を遂げたようだ、と述べた。朱天文のいう「あるもの」のベールをはがして本質を明らかにするために、まず、彼女の発言にさかのぼって全貌を見ておこう。

2008年5月4日、『巫言』を世に問うたばかりの頃に開催された、「重返現在——白先勇、『現代文学』与現代主義国際研討会（ふたたび現在に戻る——白先勇、『現代文学』とモダニズム国際研究会議）」を契機に、朱天文はもう一人の台湾人作家、施叔青と「現代主義的表妹与以写作進行三次攻堅の小説家（モダニズムの従妹と創作で三度挑戦をした小説家）」⁷¹というテーマのもとに対談した。その際、彼女はみずからのいわゆる後期小説創作、『世紀末的華麗』以降の作品について次のように解釈した。

『世紀末的華麗』から『荒人手記』まで、ひいては書き終わったばかりの長編『巫言』に至って、実はこの3冊の作品を連続してみれば、これは、私たちが『三三集刊』を編集していた時の信念に対する「棄絶」のようだ……これは過去に対する「棄絶」のようだ……あるものに3回「攻堅」していたように思う。そのことは私たちに放置され、「棄絶」され、二度と触れたくないとされているものだ……モダニズムのことはによって「除魅弑神〔神聖なものを取り除き神を殺すこと〕」をした後、神がすでにいなくなってしまう。もし先覚者がいなくなり、聖者がいなくなり、また神もなくなった時には、すべての物が神になるのだろうか⁷²。

朱天文のいう「あるもの」は、語りに沿って「信念」、「過去」、また「神（先覚者、聖者）」などに変容しながら、さまざまな様相を帯びている。また、朱天文の文学人生をふりかえてみると、これらの曖昧なことばがいずれも彼女の文学的アイデンティティ、すなわち作家胡蘭成および張愛玲との文学的関係に関わっている、ということを見逃すべきではない⁷³。『三三集刊』を創刊して以来、神のように尊ばれた胡蘭成と張愛玲に向き合い、まず短編小説「世紀末的華麗」⁷⁴の末尾で、崩壊した「世界」を再構築しようと宣言した。続いて胡蘭成の未完遺作『中国的女人』に対する「回答」とされた『荒人手記』を通じて「悲願」を果たし、ある種の自由を掌中に収めたと自叙する一方、文章あるいは対談において公然と「叛逃張愛玲（張愛玲を裏切って逃げる）」という旗を揚げつづけた⁷⁵。最後に『巫言』では、「削除法」を限界まで発揮しながら、「不结伴的旅行者（連れ立つ者のない旅行者）」に姿を変えた朱天文は、「自己的路径（自分ひとりの道）」をたどってゆく——以上の一連の動きは、「除魅弑神」を通じて文学的アイデンティティの再構築を目指した、といえるだろう。

もうひとつ注目したいのは、「棄絶」の兆しをみせる短編小説「世紀末的華麗」の執筆時間（1990年）である。もし前述したように古い文学的アイデンティティを「棄絶」の対象とすれば、なぜ朱天文はこの時点、とりわけ胡蘭成の永眠（1981年夏）を見送ってから9年が過ぎた時点でようやく、「悲願」の完遂ないし文学的継承物の「削除」といった、文学的アイデンティティの再構築をはじめようとしたのだろうか。彼女の発言にもどって見てみよう。

白〔先勇〕先生が1960年代にぶつかった台湾、中国アイデンティティの問題について、私たちは遅くとも1980年代に至ってついに向かいあった。こうした1980年代にわたって得

た深く刻まれた経験すべては、私たちの作品のなかに痕跡を留めた⁷⁶。

文学的アイデンティティの再構築に「棄絶」という目標の主眼が置かれたにもかかわらず、「深く刻まれた経験」、すなわち民進党の結党、戒厳令解除、蔣氏国民党政権の終焉といった事件を代表とする、本土化の潮流の高まりによって、1980年代の台湾で再び激しく騒ぎ立てられたナショナル・アイデンティティ問題が、朱天文の目前に浮かび上がり、彼女の後期創作活動に触媒のような影響を及ぼした。ここには「台湾、中国アイデンティティの問題」が横たわっているが、政治的洗礼を経験した彼女はどちらを選択したのだろうか。

朱天文のナショナル・アイデンティティに関わる研究は少なくないものの、異なる視角を持つ研究者たちのあいだで、彼女の「中国意識」⁷⁷、「中国意識」と「台湾意識」との間で動揺するナショナル・アイデンティティ志向についての見方は一致していない⁷⁸。他方、張誦聖は朱天文の選択について、二分された「中国／台湾意識」の制約を免れる新たな可能性があるとは指摘した。

朱天文はいつも漢民族中心の文化観を護持するが、彼女の創作はすでに徐々に浪漫的な「中国情緒」から離れつつあり、写実主義式の新郷土主義（realistic neo-nativism）へ移り変わり、現在の台湾を描くことに力を尽くそうとする……新郷土派のもうひとつのより基本的特徴は、そのイデオロギーにおいて新たな台湾アイデンティティを確立したことであり、それは「中国情緒」および「台湾情緒」の上／外に超越したものである⁷⁹。

張誦聖によれば、朱天文の世界には、これまで朱が固執していた「中国意識」、およびそれに対峙する「台湾意識」を超えた、新しいナショナル・アイデンティティが生まれていた⁸⁰。それは、台湾政治の急変という洗礼を経て、「中国がすでに具象的な現実になるにしたがって、『中国情緒』をつなぎとめるための想像的基礎も瓦解してきた。換言すれば、中国はもはや懐かしむ、あるいは思いを馳せるためのひとつの『過去』ではない⁸¹という理由にもとづく。衝撃を受けながら揺らぎはじめた「中国意識」と、すさまじい勢いで高まってきた「台湾意識」を見つめる朱天文は、「私のその古き良きもの〔強大な信念と価値観〕は、明らかに大きな嵐にあった⁸²と自覚し、短編小説「世紀末の華麗」によって文学的アイデンティティの再構築をはじめた。それと同時に、かつて信仰した「中国意識」に対する「棄絶」も開始し、新しいナショナル・アイデンティティを探し求めてゆく⁸³。だが、この時期には、中国的な物事への思いがまったく消えてはおらず、新しいナショナル・アイデンティティに繋がる物事への傾倒も存在したことはいうまでもない。すなわち、この時期の彼女は「イデオロギーとしてはっきりと自覚化された心的状態⁸⁴でなく、「自覚以前の心的傾向性⁸⁵にとどまっていた。つまり、朱天文はナショナル・アイデンティティの選択が明確でない「混乱時期」に陥っていた、といっても過言ではないだろう。したがって、『日神の後裔』における登場人物の持つナショナル・アイデンティティの齟齬は、1980年代にかけて高まっていた台湾本土化の渦に巻き込まれ、激変を体験した朱天文の、ナショナル・アイデンティティの「混乱時期」の投影、あるいは朱天文自身のいう「痕跡」であるともいえよう。

このように、小説作品における「故郷」の変貌は、登場人物たちのナショナル・アイデンティティの齟齬という橋渡しを経て、朱天文自身のナショナル・アイデンティティの「混乱時期」へと直結した。「記憶」の混乱も後れをとらず、「表」の役割を果たしていた「故郷」の変貌を突き破って、「裏」に潜伏した朱天文自身のナショナル・アイデンティティの変容に密接に関わりあっていたのである。

むすびに

以上、朱天文の未完の長編小説『日神的後裔』および短編小説「世紀末的華麗」における、登場人物が追い求める「故郷」のあり様について考察することで、登場人物たちのナショナル・アイデンティティの層を乗り越えて、朱天文自身のナショナル・アイデンティティという層に到達することができた。『日神的後裔』の登場人物は、宋美齡の往事を偲びつつ、敬意を払うことで、過去の「記憶」を想起した。そして「中国史観」の産物といえる「昨日の世界」に呼びかける一方、「神話」の瓦解に直面しながら、不可避的に「記憶」に疑義を抱き始めた。こうした異なる様相を呈する「記憶」は、登場人物の持つナショナル・アイデンティティの齟齬に繋がっているだけでなく、1980年代にかけて台湾の激変を体験した、朱天文自身のナショナル・アイデンティティの「混乱時期」の投影でもあった。

以上を踏まえ、『日神的後裔』の執筆中断の原因は次のように推測できるだろう。時代の渦に巻かれていた際に、「いつも漢民族中心の文化観を護持」した朱天文は、台湾政治社会の急変という洗礼を受けた後、ある種のナショナル・アイデンティティの「混乱時期」に身を置いた。ナショナル・アイデンティティの「混乱時期」において起きた「記憶」の齟齬は、「故郷」という概念を通して、朱天文の文学創作に「痕跡」を留めた。『日神的後裔』の執筆中に、「故郷」に関する「記憶」に対しての呼びかけ、および疑義が同時に現れ、「記憶」の齟齬——朱天文のいう「血肉」と「枝幹」の未熟となって凝結した。このように、「裏」に隠されたナショナル・アイデンティティの「混乱時期」は、複雑な原因に内包される要素のひとつとして波紋を呼び、『日神的後裔』の執筆中断を引き起こしたのではないだろうか。

本稿では、主に現実面（社会の激変によって残された「痕跡」）に着目し、朱天文の持つナショナル・アイデンティティの変容を可能性のひとつとして、長編小説『日神的後裔』の執筆が中断された原因について論じた。一方、精神面（古い文学的アイデンティティに対する「棄絶」）⁸⁶の影響は、朱天文研究において不可欠な部分である。これについては稿をあらためることとしたい。

付記

本稿は第23回日本台湾学会学術大会分科会での報告を修正したものである。研究発表の際、コメンテーターの池上貞子先生、座長の倉本知明先生から多大なご教示をいただいた。また、本稿の修正過程において、指導教員である星名宏修先生、査読者及び編集委員の先生方から貴重なコメントをいただいた。深く感謝を申し上げたい。

注

- 1 作家、映画シナリオライター。1956年台湾高雄鳳山生まれ。『荒人手記』（1994）によって台湾紙『中国時報』の百萬元懸賞小説賞の首席に選出された。小説を書く一方、『風櫃の少年』（1983）から『黒衣の刺客』（2015）まで、侯孝賢のほとんどの映画における脚本の創作に参加した。また、陳坤厚『少年』（1983）やエドワード・ヤン『台北ストーリー』（1985）など、ほかの台湾の監督の映画においても脚本を手がけた。
- 2 張啓疆・朱天文『『我』的裡面有個『她』——專訪朱天文』『中国時報・人間副刊』、1994年6月14日。原文「一九九一年二月我交出《戲夢人生》劇本後，即開始構思這麼一部觸角遍及台北，台灣，古今中外，歷史，神話的女性故事。下筆半年，寫了五萬餘字後，突然寫不下去了，原因可能是徒有意念，血肉枝幹醞釀得不夠成熟」。
- 3 たとえば、黃錦樹「神姬之舞：後四十回？（後）現代啓示錄？——論朱天文」（『中外文學』第24卷第10期、1996年、104-141頁）と張瑞芬「胡蘭成、朱天文与『三三』」（『胡蘭成、朱天文与『三三』——台灣當代文學論集』秀威資訊、台北、2007年、1-84頁）にこのような解釈が読み取れる。
- 4 朱天文「小針朋子訳」「世紀末の華やぎ」『世紀末の華やぎ』紀伊国屋書店、1997年、96頁。
- 5 中国語原文「有一天男人用理論与制度建立起的世界会倒塌，她将以嗅觉和顏色的記憶存活，從這裡並予之重建」〔下線は引用者〕（朱天文「世紀末的華麗」『世紀末的華麗』INK、2008年、158頁）からその予言・宣言をみると、朱天文は「記憶」によって崩壊した世界を再構築しようと狙っていたと思われる。
- 6 オーストリアの作家、ツヴァイクの回想録『昨日の世界』のタイトルを借用している。『昨日の世界』でツヴァイクは、「現在」（第二次世界戦争中）という時間点と亡命者の立場に立ち、遡って第一次世界戦争前夜から第二次世界戦争にわたるヨーロッパの社会、人々、物事の変遷を記録し、その没落する前の「精神的故郷」を追憶した。対して朱天文は、『日神的後裔』においても何度も「現世に拒否される」という思いを記し、「昨日」や「世界」といった言葉を多用し、そのすでに消えた時代あるいは「世界」を追い求めた。つまり、朱天文が追い求めた「世界」は「昨日の世界」に似通っていると考えられる。
- 7 ここの「記号」という用語はロラン・バルトの記号論を参照した。具体的な説明は「第3節 『記憶』が失効する兆し——もうひとつの『故郷』の出現」で提示する。
- 8 朱天文「日神的後裔」『花憶前身』麦田出版、台北、1996年、219頁。原文「一生裏女人們的啓蒙季節到來的時候，她的身体，她的心智，她的全部人橫蕩展開像一座新琴，沈默如深淵，沃黑似星空，等待人來打開她彈出清越華麗的樂章……這些神母的後代至今分散在四處，不計其數，境遇異殊」。
- 9 朱天文、前掲書、226-227頁。原文「当宋美齡最後一次出現在三台電視上，後來這個鏡頭反覆播放於各類新聞集錦中……物傷其類。因為她知道，從前從前宋美齡在麥迪遜廣場體育館，為籌募抗戰經費向數萬美国人演講，縱然其英文勝過美民，其腔調充滿郝思嘉《飄》式南方口音，皆無阻於其演講之前頻頻拉肚子，正如她的員工大會症候群」。
- 10 同上書、227頁。原文「她完全相信他的『重建』藍圖是真的，並非政治家之夢，而是可憐的詩人之夢」。
- 11 宋美齡の行動に関する部分については、師永剛・林博文編『宋美齡画伝』（作家出版社、北京、2008年、182-219頁）を参照。以下同様。
- 12 「宋美齡女史米国へ」『台湾総覧（1992年版）』台湾研究所、1992年、461頁。
- 13 朱天文、前掲書、226頁。原文「比方也是魚族的伊麗莎白泰勒，會跑去倫敦探望愛滋病患者並親吻其中的一名，照片出現在全球媒体，只有她相信，像她們相信她，這是真的，這不是宣伝」。
- 14 第2章「日輪月輪」には、宋美齡の渡航費用問題はマスコミの大注目を浴びたという記述がある。「しかし阿簡の店が購読している新聞は日々問い詰めており、老夫人の渡米特別機の費用は誰が払うかということに糾弾している。蔣家が払うか、党が払うか、国が払うのか？（但阿簡店訂的報日日在追殺，声討老夫人赴美專機這筆開銷是誰付，蔣家付，党付，還是国家付？）」（朱天文、前掲書、231頁）。
- 15 朱天文、前掲書、226頁。原文「宋美齡搖晃手絹向掌聲雷動的同志們道別，臨去領首而笑」。
- 16 同上書、229頁。原文「恍如昨日啊，夫人率婦聯會幹事一行女官來村子撫視縫徵衣……她素來活潑，二十五歲啾噹，被派向夫人獻花。夫人到時，鼓掌歡呼動地來，果如書中聖賢那樣領導人民出埃及把紅海分開，鴉鴉人潮亦自動剖開道路讓夫人通過」。
- 17 風雲論壇編輯部「附録：蔣夫人大事記」（『蔣夫人與元老派』風雲論壇、台北、1987年、25頁）を参照。
- 18 朱天文、前掲書、229頁。原文「在往後很長很長一段糟糠生活裏，此日的記憶永遠像荒漠甘泉灌溉她」。
- 19 同上書、229-230頁。原文「那香氣，刻骨銘心隨時間成正比拓深，到她老年的今天，結晶為玉宝。好像伝説中那人乘槎溯黃河直上到了銀河，遇浣紗女給他一石，他回故鄉很久以後才知道，某年某日有客星犯牽牛宿，計年月，是他，石是織女的浣紗石。趙建蓉離老年恍惚期尚遠，剎那醒來，常覺此生著實庸碌無可紀念，唯手中握有一石，是她從前從前曾与天女邂逅過的鉄証罷」。

- 20 同上書、227 頁。原文「旧世界在那边，赤道無風帶好鬱悶，深色的雲，無風擾亂其平衡，受到地心引力慢慢解體朝海面掉落。看啊，新世界在那边，哥倫布發現以來已近五百年」。
- 21 「新世界」『日本大百科全書』第 12 卷、小学館、1986 年、590 頁。
- 22 朱天文、前掲書、227 頁。原文「全地球都在向前滾動，蝗虫谷依然如昔」。
- 23 同上書、237-238 頁。日本語は夏目漱石『定本漱石全集 坑夫・三四郎』（岩波書店、2017 年、294 頁）から引用した。原文「世界如此動蕩，我目睹這動蕩。然而，我不能加入。我的世界和現實的世界，雖然並置於一個平面上，但任何地方都沒有接觸。世界如此動蕩，棄我而去，我甚感不安」。
- 24 同上書、230-231 頁。原文「她每月坐公車去收房租，路經一棟公寓樓底，門牆銅金塊板上鑄有八個黑字，『新疆省政府辦事處』，擦得鏡亮……是的海棠變公雞，新疆依然在。她昨天未辦成事，今天再來，夜裏有寒流鋒面經過上空，一夜之間，辦事處招牌拆撤無踪……她家巷口的二十四小時營業加盟店老陳誇示說：『統一企業已至新疆買了番茄園。』公寓內省政府主席去世後其子接任，編制也有十五人，在一夜之間，就這樣，新疆省不見了」。
- 25 上野稔弘「20 世紀末台灣におけるモンゴル承認問題について」『東北アジア研究』第 11 号、2007 年、22 頁。
- 26 香島明雄「外モンゴルの中国離脱をめぐる中ソ関係」(『中ソ外交史研究』世界思想社、1990 年、172-209 頁)を参照。
- 27 上野稔弘、前掲論文(23 頁)を参照。
- 28 同上論文(23 頁)を参照。
- 29 同上論文、23 頁。
- 30 同上論文(24 頁)を参照。
- 31 同上論文(26 頁)を参照。
- 32 同上論文、26 頁。
- 33 同上論文(24 頁)を参照。
- 34 「李登輝總統の内外記者会見」『台湾総覧(1992 年版)』台湾研究所、1992 年、601 頁。
- 35 上野稔弘、前掲論文、27 頁。
- 36 同上論文(27 頁)を参照。
- 37 菅野敦志『台湾の国家と文化——「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房、2011 年、226 頁。
- 38 同上書、294 頁。
- 39 同上書、300 頁。
- 40 「新疆省政府辦事處」の設立から撤廃までの流れは、「新疆省政府辦事處」で働いた経験を有する法提合による文章「從老外到新住民——一個哈薩克人在台灣」(藍美華編『辺民在内地』政大出版、台北、2018 年、381-467 頁)および台湾国立政治大学人文中心が主催した講演「漫談新疆省政府辦事處」(2015 年 4 月 11 日)の紹介(<https://hc.nccu.edu.tw/public/view.php?main=3&sub=24&ssub=43&id=1831>)を参照。2021 年 10 月 14 日確認。
- 41 石田浩『台湾民主化と中台經濟關係——政治の内向化と經濟の外向化』(関西大学出版部、2005 年、78-79 頁)を参照。
- 42 「貿易制度」『台湾総覧(1992 年版)』台湾研究所、1992 年、391 頁。
- 43 石田浩、前掲書(82 頁、258 頁)を参照。
- 44 同上書(258 頁)を参照。
- 45 新疆統一企業食品有限公司のホームページ(<http://www.uni-president.com.cn/drinks8.asp>)を参照。2021 年 8 月 12 日確認。
- 46 「政治上、国民党は孫中山『三民主義』の忠実な信徒と自称し、中国の民族形成、民主的制度および經濟發展に関する政治的信条を護持する。それと同時に国民党は 1912 年に孫中山によって樹立された中華民國の合法的護持者と自称する。国民党は 1936 年に中国大陆で制定された憲法が規定した政府組織構成を堅持し、中華民國が全中国の唯一の合法的政府であると強調し、絶えずに大陸を取り戻す決心を重ねて宣言し、中国共産党を反乱の『共匪』と非難する……文化の上では、国民党政府は自分が中国传统文化の『正統』、とりわけ儒家思想の護持者であると強調する(在政治上、国民党宣称它是孫中山『三民主義』の忠実信徒、堅守這一套關於中国民族建設、民主制度和經濟發展的政治信条。国民党同時宣称它是 1912 年孫中山所建立之中華民國的合法捍衛者。国民党堅持 1936 年在中国大陆訂定之憲法所規定的政府組織架構，強調中華民國是全中国唯一的合法政府，不斷重申收復大陸失土的決心，譴責中国共産党為叛亂的『共匪』……在文化上，国民党政府強調自己是中国传统文化『正統』——尤其是儒家思想——堅決的捍衛者)」と解釈することができる。蕭阿勤『重構台灣——當代民族主義的文化政治』(聯經、台北、2012 年、279-280 頁)を参照。
- 47 朱天文、前掲書、236 頁。原文「陶公携來一本創刊有三十年的老雜誌，是鄧先生從前從前也看的，但自從史料

- 不断出土後，一片一片就把鄧先生的信念解構，民無信不立，出於弱勢者的自保，他拒絕再知道内幕」。ここでいう「雑誌」とは『伝記文学』（第60巻第2期、伝記文学雑誌社、1992年2月）である。
- 48 「蔣中正啓事」『民国日報』、1927年9月28日。原文「民国十年原配毛氏与中正正式離婚其他二氏本無婚約現已与中正脫離關係」。
- 49 朱天文、前掲書、236頁。原文「張静江做的媒，証婚是他，戴季陶做主婚人」。
- 50 同上書、236頁。原文「小蔣喊她上海姆媽」。
- 51 同上書、238頁。原文「她的委屈，明鏡高懸，包青天再現，陳氏已替她申訴了」。
- 52 朱天文「小針朋子訳」『柴師父』『世紀末の華やぎ』紀伊国屋書店、1997年、6頁。
- 53 朱天文「带我去吧、月光」『世紀末的華麗』INK、2008年、120頁。原文「總之是在這里住下了，以後若再去那邊，做客嘍，入境隨俗罷」。
- 54 ロラン・バルト〔佐藤信夫訳〕『モードの体系——その言語表現による記号学的分析』（みすず書房、1972年、13頁）を参照。
- 55 同上書（13-15頁）を参照。
- 56 同上書、43頁。
- 57 ロラン・バルトの記号論にもとづき朱天文のファッション情報を考察する方法については、張劭「服飾背後の多重符碼——從張愛玲的『更衣記』到朱天文的『世紀末的華麗』」（『文芸争鳴』第7期、2013年、80-82頁）を参照。
- 58 朱天文、前掲「世紀末の華やぎ」『世紀末の華やぎ』、64-65頁。
- 59 王德威「從『狂人日記』到『荒人手記』——論朱天文，兼及胡蘭成与張愛玲」（『世紀末的華麗』INK、2008年、201-218頁）を参照。
- 60 朱天文、前掲「世紀末の華やぎ」『世紀末の華やぎ』、75頁。
- 61 同上書、76頁。なお吳淑珍の夫は陳水扁である。
- 62 同上書、89頁。
- 63 同上書、90頁。
- 64 同上書、90-91頁。
- 65 邦訳版に登場する「故郷」の中国語原文は「郷土」である。土着の台湾本土（台中）を自身の「郷土」とみなす見方に対する拒否は、当時の「回歸郷土」という社会潮流に対するある種の反抗だと思われる。
- 66 朱天文、前掲「世紀末の華やぎ」『世紀末の華やぎ』、89頁。
- 67 成田龍一「都市空間と『故郷』」『故郷の喪失と再生』青弓社、2000年、35頁。
- 68 成田龍一「『故郷』という物語——都市空間の歴史学」吉川弘文館、1998年、90-91頁。
- 69 ベネディクト・アンダーソン〔白石隆・白石さや訳〕『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リブレポート、1987年、17頁。
- 70 『世紀末的華麗』が転換点であるという見解は、王德威前掲論文、詹宏志「一種老去的声音」（『世紀末的華麗』INK、2008年、5-11頁）などにも見られる。なお、『世紀末的華麗』、『荒人手記』、『巫言』を「三部作」とする見方は、施叔青との対談「現代主義的表妹与以写作進行三次攻堅的小説家」（白叡文・蔡建新編『重返現代——白先勇、現代文学』与現代主義』麦田、台北、2016年、122-136頁）に基づく。
- 71 主題にある「現代主義的表妹」とは施叔青を指す（陳芳明「現代主義的表妹」『印刻文学生活誌』第3巻、2007年、124-130頁）。一方、「以写作進行三次攻堅的小説家」は朱天文を指すと思われる。
- 72 朱天文・施叔青、前掲対談、133-135頁。原文「從《世紀末的華麗》到《荒人手記》，甚至到剛剛写出来的長篇《巫言》，其实把這三部作品連起来看的話，好像是对我們辦《三三集刊》那時候的信仰的棄絶……這好像是对一個過往的棄絶……覺得好像是在三次攻堅一個東西。這個東西就是被我們擱置、棄絶，不想再去碰的東西……現代主義語言的『除魅弑神』後，大神已經不在了。如果沒了先知，沒了聖者，也沒了大神的時候，那麼是不是物物都是神」。
- 73 胡蘭成と張愛玲との文学関係について記すと、朱天文はデビュー後、「張派作家」（王德威「張愛玲成了祖師奶奶」『落地的麦子不死——張愛玲与「張派」伝人』山東画報出版社、済南、2004年、2-3頁）、「胡蘭成学派第一人者」（陳芳明「下村作次郎ほか訳」『台湾新文学史・下』東方書店、2015年、344頁）などと認められていた。
- 74 「三部作」に含まれるのは短編集『世紀末的華麗』であるが、朱天文は実際には短編集『世紀末的華麗』収録の同名の短編小説「世紀末的華麗」のみについて語っている。
- 75 朱天文『黄金盟誓之書』（INK、台北、2008年）に収録された文章「忘情之書」（223-234頁）と「花憶前身——写於『張愛玲与現代中文文学国際研討会』」（249-257頁）を参照。
- 76 朱天文・施叔青、前掲対談、128頁。原文「白老師在一九六〇年碰到的台湾、中国身分認同的問題，我們要遲

遅到了一九八〇年代才碰到。這整個一九八〇年代深刻的經驗，在我們的作品裡頭留下了痕跡」。

- 77 一言で述べるとすれば、中国の歴史、文化、地理に対する情熱を持ち、中国大陆との繋がりを重視することから生じる中国ナショナリズムである。それに対し、「台湾意識」は台湾本土の歴史、文化を重視する台湾ナショナリズムであるといえる。蕭阿勤、前掲書（180-182頁）を参照。
- 78 たとえば、発表の時期がわずか1年異なるだけの、莊惠雯「外省作家第一代与第二代族群認同比較研究——以朱西甯、朱天文、朱天心為例」（静宜大学修士論文、2003年）と孫潔茹「遊移／猶疑？——朱天文、朱天心及其作品中的認同与政治」（国立成功大学修士論文、2004年）は、朱天文のナショナル・アイデンティティの傾向に対して異なる見解を示している。
- 79 張誦聖「高志仁・黃素卿訳」『朱天文与台湾文化及文学的新動向』『中外文学』第22卷第10期、1994年、80-85頁。原文「尽管朱天文向来捍衛大漢中心的文化觀，但她的写作已逐漸抽離浪漫式的『中国情結』，轉向写実主義的新鄉土主義（realistic neo-nativism），致力於描繪当代的台湾……新鄉土一派更基本的另一個特色，在於其意識型態上確立了一個新的台湾認同，超乎了『中国情結』及『台湾情結』之上／外」。
- 80 「台湾意識論戰」は「中国結／台湾結論戰」とも呼ばれる。論戰中、「中国／台湾意識」にかわって「中国結／台湾結」という言い方を使う場合も多かった。ここで張誦聖が語る「中国／台湾情結」は、通常言われる「中国／台湾意識」と同一であると思われる。
- 81 張誦聖、前掲論文、84頁。原文「中国既已變成具体的現實，『中国情結』所賴以維系的想像基礎也因之瓦解，換句話說，中国再也不是一個可供懷旧遐想的『從前』了」。
- 82 朱天文「廢墟裡的新天使」『荒人手記』新經典文化、台北、2011年、222頁。原文「我的那些旧的好東西〔強大的信念和價值觀〕，顯然碰到了大風暴」。
- 83 朱天文が「中国意識」を護持した背景には、国民党政府主導下の学校教育において、国民党側の軍人作家である父親朱西甯の「家学」、および朱天文と師弟関係を保っていた胡蘭成の「師学」の影響を受け入れ、戒嚴令解除まで行ったことのない中国大陆に理想的な感情を抱いていたことがある。朱天文、前掲『黄金盟誓之書』収録の「做小金魚的人」（237-241頁）、「揮別的手勢」（242-248頁）および「記胡蘭成八書」（153-234頁）を参照。
- 84 松永正義「『中国意識』と『台湾意識』——揺れ動く中国／台湾イデオロギーの構図」、若林正丈編『台湾：轉換期の政治と経済』田畑書店、1987年、281頁。
- 85 同上書、281頁。
- 86 『荒人手記』における主人公の親友・アーヤオの状況と同様に、『日神的後裔』において「宋美齡」という人物には、朱天文の精神的指導者といえる胡蘭成の影が重なっていると考えられる。つまり、朱天文の古いナショナル・アイデンティティと文学的アイデンティティに対する「棄絶」は、ある意味で軌を一にしていたと思われる。

(2021年10月15日投稿受理、2022年5月1日採用決定)